

# PROGRAM

- ベートーヴェン 「エロイカ」の主題による15の変奏曲とフーガ 変ホ長調
- ベートーヴェン ピアノソナタ 第21番 ハ長調 作品53 「ワルトシュタイン」
- ムソルグスキー 組曲「展覧会の絵」

## 四季のコンサート 冬

1994年11月5日(土) 6:45PM  
浜松市民会館ホール  
主催：浜松音楽友の会

を開くことも許されなくなったため、77年ソ連を離れる。同年10月ニューヨークのソカーン・センターでリサイタルを行い、大喝采を受けてアメリカ音楽界にデビュー。その後のカーネギー・ホールでのコンサートの特約は完了し、彼女は世界の主要なピアノの仲間入りを果たした。以来世界各地で演奏会を開き、81年には初来日をして

93年、ストラスブール・フィルハーモニー管弦楽団のソリストとして3年目の来日をし、同時に行ったリサイタルでも絶賛を博した。

1942年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院で名教師ゴールデツァイザーに師事。  
・63年のロンドン・チャイコフ・コンクールで第2位、65年リオデジャネイロ・ピアノ・コンクールで第1位、69年ウィーン・ベート・ヴェン・コンクールに第2位と、各地の国際コンクールで優勝や入賞を重ねて注目された。  
しかし、その後は当時のソ連政府により国外への演奏旅行だけでなく国内で演奏会

オクサナ・ヤブロンスカヤ

ピアノ

オクサナ・ヤブロンスカヤピアノリサイタル

10周年達成記念

共催：浜松市教育委員会





## 「エロイカ」の主題による15の変奏曲とフーガ 変ホ長調 作品35

ベートーヴェン

この変奏曲は、ベートーヴェンが1800年から1801年にかけて作曲したバレエ曲「プロメテウスの創造物」の終曲から引用した主題に基づいて、1802年に書かれている。したがって、この作品の本来の名は「プロメテウスからの主題による変奏曲」であったのだが、ベートーヴェンが同じ主題を交響曲第3番「エロイカ」の終楽章にも用い、こちらの方が有名になったことから「エロイカ」変奏曲の名で親しまれるようになった。ヘレン版の楽譜では、タイトルは「15 VARIATIONEN」(MITFUGE)「15の変奏曲(フーガつき)」となっている。

曲の冒頭で提示されるのは、主題のバスの旋律である。ベートーヴェンはまず、旋律的な主題なしに、いわば和声の骨格をもとに、2声、3声、4声のカノンを通し、この部分は全体の導入部となる。そのあとによりやく主題が奏され、比較的短い14の変奏、そして長大な第15変奏が続く。第7変奏は「オクターヴのカノン」であるが、このあたりにもバッハの「ゴールドベルグ変奏曲」を思い起こさせるものがある。第15変奏では、装飾音がとても美しい。アレグロ・コン・ブリオのフィナーレ「Alla Fuga フーガのように」は、冒頭と同様に低音旋律に基づく自由なフーガである。

ひとつの「閉じられた」旋律的主题に基づいた従来の変奏曲に対し、作品35は全く新しい変奏曲のモデルを示している。この作品においては、「主題」とされる「エロイカ」の旋律は、従来の意味での変奏の主題ではなく、この主題の旋律ならびに和声の枠組み、低音主題、旋律の骨格等、すべてが展開の材料となっている。

## ピアノ・ソナタ 第21番 ハ長調 作品53 「ワルトシュタイン」

ベートーヴェン

「ワルトシュタイン」の名称で知られるこのソナタは1804年に完成されたもので、「月光」(作品27-2、1801年)や「熱情」(作品57、1805年)などと並び、ベートーヴェンの中期を代表するピアノソナタである。彼にとっての最大のバトロンであったワルトシュタイン伯爵に献呈されたため、この名がついた。

卓越したピアニストでもあったベートーヴェンにとって、ピアノという楽器は靈感のみならずともあった。当時のピアノは主にウィーン式とイギリス式の2種類に大別できるが、モーツァルトの好んだウィーン式は、軽いタッチと反応の良いアクションを特徴とし、イギリス式は、力強い大きな音が出ることで知られていた。パリの楽器製作者セバスチャン・エラールは、鍵盤の跳ね返りが良くなるレベティションアクションを考案し、それによってイギリス式のメカニクを改良し、音域も5度拡大したものを製作した。エラールは、1803年にこの楽器をベートーヴェンに献呈しているが、「ワルトシュタイン」の印象的な連打のパッセージや、音域を最大限に使って大音響を引き出す「情熱」などは、このピアノなしには生まれなかったであろう。

さて、2楽章からなるこの作品は、来年はアンダンテの緩徐楽章をはさんだ3楽章構成であった。この楽章は、「このソナタは長すぎるという、ある友人の示唆にしたがって」削除され、新たに28小節からなる「イントロダクション」が第2楽章冒頭に挿入された。(削除されたアンダンテは、独立した曲[WoO.57]となって出版されている。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオ。8分楽譜の連打に乗って、軽快な第1主題が提示される。第2主題はコーラル風で、第1主題と対照をなす。第2楽章のはじまりは、アダージョ・モルトの「イントロダクション」である。短いながらも3部形式をなし、緩徐楽章としての役割を果たし、アタックで「ロンド」に続く。ここではオクターヴやトリル、重厚な和音が駆使され、音楽はさまざまな相を呈する。ランドスケープのような第1楽章に、イントロダクションのより人間的な声が対比されるが、ロンドではそれらが統合され、豊かさを増していく。長大なトリルから決然とした終結部に入り、堂々と曲を閉じる。

## 組曲「展覧会の絵」

ムソルグスキー

絵画や彫刻などから靈感を得た音楽作品としては、リストの『巡礼の年』から「婚礼」(ラファエロ)、「物思いに沈む人」(ミケランジェロ)、ラフマニノフの交響詩『死の島』(ベックリン)など、いくつもの例を挙げることができるが、ムソルグスキーの組曲『展覧会の絵』は、その中でも非常にオリジナルな作品である。

ムソルグスキーの作品は、絵画のタイトルを標題とすることによって、純粋器楽の作品を構成するにあたっての形式的な制約から逃れると同時に、異なった性格の小品を集め、ひとつの大きな作品としてまとめることに成功している。ちょうど、本来は独立した個々の作品が、展覧会場においてひとつの空間に並置されることにより互いの意義を導き出すように、この組曲においても、寓話的、歴史的、宗教的等、さまざまなイメージを表現する個々の作品が、有機的に関連づけられている。この作品のイメージの源泉となったと言われる画家ガルトマンの遺作展における絵画については、所在の明らかでないものもあることは既に知られるところだが、いずれにしても、ムソルグスキーはこの作品において、ガルトマンの絵を標題とした性格小品集を書いたのだと考えるのが妥当であろう。

この作品は、19世紀ピアノ音楽史の脈絡においては、シューマンの『謝肉祭』などの小品集の系列に属するものであり、また、バラキレフの『イスラメイ(東洋風幻想曲)』と並ぶ19世紀ロシアの重要なピアノ作品となっている。ピアニストとしても優れたムソルグスキーであったが、彼の生前に公にこの作品が演奏された記録はない。ムソルグスキーの他の多くの作品と同様に、この作品もまた、19世紀ロシアにおける最も重要な文化人のひとりであり、この作品が献呈された人物でもあるウラジーミル・スターツォフが『展覧会の絵』の存在を世に知らしめた。

全体は、5つのプロムナードをはさんで、全10曲が次のように構成されている。

プロムナード

第1曲「グノームス」

プロムナード

第2曲「古城」

プロムナード

第3曲「テュイルリーの庭」

第4曲「ヴィドロ」

プロムナード

第5曲「殻から出さらない雌のおどり」

第6曲「サミュエル・ゴールドデンベルクとシュミユイレ」

プロムナード

第7曲「リモージュの市場」

第8曲「カタコンブ」

第9曲「鶏の足の上の小屋。バーバ・ヤガー」

第10曲「キエフの大門」